

## 姨捨山の月

土田龍太郎

古き世の歌物語の内、伊勢物語につぎて長く人の親しみきたれりしは大和物語にほかなかるべし。ここに載れるめでたき歌げにいとあまたなれば、數ふるにいとなかるべし。大和物語の伊勢物語より後れて成りしことばかりこそは疑ふまじけれ、その作者たれ人なりしや、大和國といかなるちなみありて大和物語と名附けしや、とみには明<sup>あや</sup>めがたきことこらありて、物知り人のこちたき論<sup>あやつら</sup>ひくさぐさなるめれども、それをここになまさかしらに綺<sup>いろ</sup>ふともなにかはせむ。

今いささか勘へまほしきは、世に名に立てる姨捨<sup>をはずて</sup>山の歌にて、大和物語には第百五十六段に載りたり。同じ歌、古今集卷十七雜上、新撰和歌集卷四戀雜、古今六帖卷二雜月にも入りたれど、長き草子地<sup>そな</sup>を具へたるは大和物語の同段ばかりにて、古今集にては詞書もなくてただ題知らず讀人知らずとのみ記せり。

大和物語草子地によるに、この歌詠みしは信濃國の更級に住みける名もなき男にてぞありける。この男、幼きころより姨に育まれて人となることをえしかども、妻となれるものころねぢけたる女なりしかば夫の姨をいたく憎みて、かかる老人ただ深き山の奥に捨てねよとたえず夫にせまりつるままに、男抗<sup>あひか</sup>ひがたくて姨を負ひて山に登り高き峰の上に捨ててやがて逃げ歸りけり。さはれ母のごとくおのれをいつくしみ育てし姨を捨てぬることただ悔まれて、山の上に照る月を見るにいとたへがたく、つひにまた姨を山より里につれ戻しけりとぞ。あはれふかきことよなきこの話のはて、左に歌と草子地をさながら引かむにはしかじかし。

年ごろ親のごと養ひつつあひ添ひてければいとかなしくおぼえけり。この山より月もいとかぎりなく明くて出でたるをながめて、夜一夜いもねられず、かなしくおぼえければ、かく詠みたりける。

わが心なぐさめかねつ更級やをば捨て山に照る月を見て

と詠みてなん、またいきて迎へ持て來にける。それよりなん、姨捨山と言ひける。  
なぐさめ難しとは、これがなんよしにありける。

草子地のかかる書きざまにさながら従ふとせば、山を姨捨山と名附けそめぬるは、男の一人たび捨てし姨をまた迎へ取りぬる後のことなるにまぎれなきなり。しかるに姨をつれ戻すに先立ちて男の口遊める一首にすでに姨捨山てふ所の名がの入りぬること、いかにとも心えがたしと云はでやはあらむ。

一たびは山に捨て去りし姨を悲しみにえたへぬままにふたたび迎へとりし男のこと古くより更級の里人の語り傳へたりしにてもやありけむ。かかる語り傳へにしたがひて、姨捨山てふ所の名いつしか定まりて後、同じ傳へを聞きたりしたれとも知れぬ歌人、この傳へのあはれなるにたへかねて、わが心なぐさめかねつの一首をふとものせしことありとや思ふべからむ。そはともかくもあれ、姨捨の男と一首の作者と異人なりと考へではあるべからず。姨捨山てふ所の名につきて、歌と草子地とうちあはぬことすでに述べたれども、この草子地を著せるは、さらに後の世のものしわざにて、大和物語の作者の筆になれるものなることおほかたは疑ひなかるべし。

わが心なぐさめかねつと云へるこの歌の初めの十二文字にこまれる歎きの深きことはてしもなし。われをいつくしみ育みきたりし老いたる姨をただ今棄ておきぬる山の嶺をなほつれなく照す月の光をうち見るからにやがてよろづの思ひのつりきてくれまどひぬる男の心の内げにいかなりけむ、身のおきどころもなかりけらしと云はむもおろかなるべし。この男と一首の作者と異人なるはすでに述べたれども、この歌詠めりしものそもいかなる歌人なりけむ、名さへ知られねど、いかに述べむとも述べつくしがたきひたぶる心をただ一息に詠み下せるいさをしなほざりの歌人のえなしとぐるわざにてはよもあらず。げにこの人、生得の歌讀みなりと云はむもはばかりなかるべし。

ちぢに亂れ四方にあくがれてはてもなかるべきわが心をからくも束ね收むるは、わが心なぐさめかねつの十二文字にほかならず。げにこの十二文字によりてぞ、この一首魂鎮めの歌になりおほせたりと云はむも誤りなかるべし。大和歌のさきはひげにさまざまなるはさることなれども、わけてもいみじきは魂鎮めのくすしきわざなること、姨捨山の月の一首によりてぞさらに悟りうべき。

(令和四年六月二十七日受附)